

昭和のテレビ物語：第10話【渡辺のジュースの素】^{け へる きょうじゅ} 2022.12
冗句大学笑学部 毛減狂寿(高橋揚一)



ミシミレドレツレレ、シッシシラソドッドド、フィフィ〜イ。毛減先生今晚は。
やあ今晚は、元気かね？ 何でも考えかんでも知って、何でもかんでもやってみよう。さて今日は…。

♪あーら おやまあ ほほいのほーいともう一杯 渡辺のジュースの素ですもう一杯 憎いくらいにうまいんだ 不思議なくらいに安いんだ へへー 渡辺のジュースの素ですよ オレンジパイングレープと 3つの味がどれでも1杯分5円 安いまい それに悔しいくらいに便利です♪
粉末ジュースの先駆「渡辺のジュースの素」。喜劇王榎本健一のダミ声の歌で人気を博した。

現在では果汁100%の飲料だけがジュースと表記でき、果汁100%ではないドリンクをジュースと表記すると、罰則が科せられる。昭和30年代はそのような法律が制定されてはおらず、果汁が入っていないかも知れないなどと疑うこともなく、粉末ジュースや粉末ソーダなどを飲んでいた。粉を指に付けてそのまま舐めたりもした。

朝のニュースショー番組『スタジオ102』は、昭和40年にNHKで放送が開始された。それまではNHKも民放も朝や昼はニュースや天気予報などの番組が小刻みに組まれていたが、この頃からテレビ朝日の『木島則夫モーニングショー』や『桂小金治アフタヌーンショー』などのワイドショー番組が始まった。ニュースのほかさまざまなコーナーが用意されて、NHK『スタジオ102』では化学の実験なども行われている。

ファンタ・オレンジをビーカーに注ぎ、オレンジを絞った天然果汁と並べて、中に白い純毛の毛糸を入れてアルコールランプで熱することにより、疑似果汁は色素が吸収されてしまうことを示す実験を行った。当時は発癌性の成分も含まれていたという。

ボトルに紙を巻いて商品名を隠されたファンタ・オレンジだったがアメリカのデザイナー、レイモンド・ローウィによる独特のボトルが功を奏して視聴者にはすぐにファンタだとわかってしまった。

現在は果汁1%と表記されているが、当時はこうした表記の義務はなく、名称にオレンジと記されているので、オレンジは入っていないのではと疑う人はいなかったのだろう。その後の法改定により背面に小さく「無果汁」と記されるようになり、他の成分も表示されるようになった。

発癌性の甘味料は他の成分に変更されて、液の色から毒々しさが除去されているらしいが、名称は今なお「ファンタ・オレンジ」のままである。

「ファンタ・オレンジ色」と悔い改めないのはなぜだろうか。「オレンジ」という言葉には果物の名称だけではなく色の名称もあるからと居直っているのだろうか。でもそれは「ファンタ・グレープ」には通用しない。

「ファンタ・オレンジ」とは「オレンジ」が入っていることを表現するのではなく「オレンジ」が入っていないことをひたすら隠蔽する役割を担ってしまった。表現=隠蔽である。身の回りには「ファンタ・オレンジ」のような隠蔽的表現が蔓延しているのではないか。「渡辺のジュースの素」の頃はそんなことには気付かないノーテンキな時代だったのだろう。 以上

拙著『デザインと記号の魔力』(勁草書房)より



あーらおやまあ…



オレンジパイングレープと…



1杯5円袋と徳用大袋



NHK『スタジオ102』



左がファンタで右が天然果汁



ファンタのボトル